

## 油やし プランテーション

**油やしの収穫作業** 油やしの原産地は西アフリカであるが、今では東南アジアが生産の大半を占めている。熱帯植物油のうちでココやしの栽培が停

滯的であるのに対して油やしは栽培面積、生産量ともに増加を続けている。油やしの収穫作業は危険を伴う重労働である。苗木を苗床から育てて1年経つと圃場に移植するが、成長は早く5年もすれば実をつける。樹高は数年の間は小さくて、大型の彫刻刀状のノミで実の房を切り落とすことができるが、年とともに急速に樹高が高くなるので、長いポールの先端に大きなカマのような刃物を取りつけた道具で房を切り落とす。長いポールは重くて撓うから先端の刃物をうまく操るのは難しい。房を切る前に周辺の葉を切り落とす。葉といっても巨大な葉柄に5寸釘のようなとげがたくさん生えている。房はまっすぐに落下するから避けやすいが、葉は真っ直ぐに落ちないこともまれではないから、注意を要する。熟した房が高いところから落下すると、実がたくさん飛散する。飛び散った実を拾い集める作業は子どもでもできる軽作業であるが、1個20kg以上もある房を一輪車のネコで起伏のあるところを運んで農道脇に集めるのは重労働である。収穫作業は1人1日平均10～50房である。

油やしの実はネズミの大好物である。高温高圧の蒸気による処理をした後の実は食べられないことはないが美味しくはない。ネズミの天敵は蛇である。ネズミをねらう蛇のなかには毒蛇のコブラもいる。油やし農場の作業中にコブラに遭遇することもある。

**パーム油の用途** 油やしの果実から採れるパーム油はマーガリン、アイスクリーム、ケーキ、ポテトチップス、即席麺など色々な食品に用いられ、石けん、シャンプー、化粧品、洗剤などの非食品も含めて、私たちの生活の中で広く役立っている。

**作付面積の拡大** マレーシアにおける油やしの作付面積は1959年の約5万haから2002年には約367万haへと大幅に増加している。プランテーション、小農別では1985年まではプランテーションが大きかったが、86年

マレーシアの油やし栽培面積の推移 (単位: ha)

	プランテーション (40ha以上)		小農場 (40ha未満)	合計
	農場数	面積	面積	面積
1960	62	51,053	0	51,053
1965	121	84,146	12,799	96,945
1975	690	389,756	252,035	641,791
1985	1454	766,756	715,643	1,482,399
1995	2831	1,255,466	1,284,621	2,540,087
2000	3581	2,024,286	1,352,378	3,376,664

出所: マレーシア統計局およびマレーシアパーム油公社

には小農が上回る。1996年以降、再びプランテーションが上回って現在に至っている。連邦土地開発公社は貧しい入植希望者をターゲットに小農経営を確立することが本来の目的であったが、工業化が進む中で入植希望者も減少し、公社は80年代後半からプランテーション部門に重点を置くようになった。大規模私企業農園と中小華人農園を併せて、マレーシアのプランテーションの平均規模は約600haであり、平均従業者数は100人程度である。近年、ゴムの植え替え時期に、ゴムに代わって油やしが植え替えられる例が多くなって

いる。マレーシアでは連邦土地開発公社によって1970年代以降、何万haもの巨大開発計画がマレー半島の内陸と東海岸地方で行われた。その結果、マレーシアのパーム油生産は急増し、1980年代、アメリカの大豆油業者らによる反熱帯植物油キャンペーンが繰り返された。

パーム油生産の第1位はマレーシアで約5割を占め、第2位のインドネシアは約3割を占めている。インドネシアでは、1980年代以降油やし栽培面積が増加しており、スマトラ全域をはじめとして、イリアンジャヤなどの東部地域にも広がっている。また一時凍結状態だったフィリピンのミンダナオでも油やしプランテーションの開発が推進されることとなった。しかし近年の大規模な油やしプランテーションの開発はインドネシアにおける森林火災や森林破壊の最大の原因と目されているなどの問題もある。マレーシアでもマレー半島部の栽培面積の増加は緩やかになってきたが、ボルネオ島のサバ、サラワクでは急速な増加が続いている。今後ともパーム油の伸びは著しく、近い将来、パーム油が世界の植物油の第1位を占めるものと予想されている。(拓殖大学経済学部教授 平戸幹夫)